

受動態と非人称の transitivity system — 日仏対照研究へ向けて —

東郷 雄二

1. はじめに

受動文は言語学のなかでも最もよく研究されている統語現象のひとつである。にもかかわらず、受動文にはいまだに考察すべき問題点が数多く残っている。そのひとつは受動文の機能の問題である。受動文がいかなる機能を果たすかという点に関しては、さまざまな説が対立している。本稿では受動文を非人称構文と比較することから始めて、transitivity system のなかでの機能を明らかにし、次に日本語の受動文との比較を通じて、動作主 agent という重要な意味役割をめぐって展開する統語現象を考察する。

2. 非人称構文の「テキスト機能」textual function

筆者は既に東郷・大木（1987）で非人称構文の問題を取り上げたが、そこでは非人称というカテゴリ全体を扱ったのではなく、次例のように人称構文と対をなす、いわゆる非人称ヴァリエント *variante impersonnelle* のみを分析した。

(1) a. Un grand malheur lui est arrivé.

b. Il lui est arrivé un grand malheur.

そこで明らかにしようとしたのは、次の点である。

(A) 非人称ヴァリエントは、対応する人称構文なら主語になる名詞句を、脱テーマ化する統語手段である

例えば(1)b.の非人称ヴァリエントを見ると、対応する人称構文(1)a.で主語位置を占めている名詞句 (un grand malheur) が動詞のうしろに置かれている（以下この名詞句を postverbal NP、略してpvNPと呼ぶ）。この名詞句は、動詞 arriver の格モジュールでは <X arriver qqpart> の唯一の actant であり、格表示では主格を付与される名詞句である。それが(1)b.では動詞のうしろに置かれているのは、主語が本来無標の弱いテーマ (thème faible) の位置であり¹⁾、非人称ヴァリエントが談話機能的な動機づけによって名詞句を脱テーマ化する (déthématiser) 統語手段であるためである。非人称ヴァリエントは、不定名詞句を新たに談話空間に提示する「提示機能」fonction présentative を持つ提示文であり、非人称ヴァリエントを取る動詞の意味カテゴリーが「存在・出現・消滅」に集中しているのはこのためである。

(B) 非人称ヴァリエントで実主語と呼ばれることのあるpvNPは、あらゆる意味で主語としての性質を失っている。

上の例(1)b.のpvNP un malheurは、動詞の一致の支配を失っているばかりか、次の点で主語としての性質 subjectivity ²⁾ を失っている。

(i) pvNPは不定名詞句と後方照応的定名詞句に限られており、談話空間での指示の確立の度合いの低い名詞句、言い換えれば「トピック性」 topicality³⁾の低い名詞句である。

(ii) pvNPを統計的に調査してみると、物を表わす非可算名詞と抽象名詞が多く、人を表わす可算名詞は少ない。これらはいずれも「目立ち度」 saliencyの低い名詞句であり、topicality が低いと同時に、動作主になりにくい名詞句である。

(iii) pvNPはジェロンディフの意味上の主語になることができず、この点でも主語を特徴づける動作主性 agentivity は低下している。

以上を総合すると、プロトタイプの主語が topic/agent であるとするならば、pvNP は non-topic/non-agent であり、主語性が著しく低下していることを示すことができる。

非人称ヴァリアントのこのような特徴は、名詞句の「脱テーマ化」という談話的機能に由来するもので、これは非人称ヴァリアントのもつ「テキスト機能」 textual function⁴⁾に他ならない。

3. 非人称構文の「他動性機能」 transitivity function

このように東郷・大木（1987）では、主として非人称ヴァリアントのテキスト機能を中心に考察したが、非人称構文にはもうひとつの側面があることも指摘した。それは非人称構文の持つ他動性機能 transitivity function⁵⁾である。

(iv) 非人称ヴァリアントにできる動詞は談話的要因によって決まるので、語彙的に特定することはできない。しかし実際の用例を調査すると、自動詞（なかでも存在・出現・消滅を示す自動詞）・代名動詞（いわゆる受動的用法）・他動詞の受動態に限られており、他動性 transitivity の低い動詞に限定されていることがわかる。また時制についても、完了形よりは未完了形が多く、これも非人称ヴァリアントが他動性の低い構文であることを示している⁶⁾。

この他動性機能は上に述べたテキスト機能と密接に関連しており、相互に連“する形で文の構造を決定している。またこのふたつの機能は語順と関連していて、その関係を名詞句と動詞の関係として図式的に表すと次のようになる。

(i) [] V : preverbal position
high topicality / agentivity / transitivity

(ii) V [] : postverbal position
low topicality / agentivity / transitivity

動詞の前の位置はトピック性・動作主性ともに高い位置であり、この談話的・意味的性質が、動詞自体の他動性の高さと同様に連合して、文全体の他動性の高さを生み出す。一方、動詞のうしろの位置はトピック性・動作主性ともに低い位置であり、低い他動性の動詞と結びついて、文全体は他動性の低いものとなる。

したがって(1)にあげた人称構文と非人称ヴァリアントとは、単にテーマ・レーマ関係にかかわる文のテキスト機能のレベルで異なっているだけではなくて、文の他動

性のレベルでもまた異なっているのである。すなわち、人称構文が他動性の高い構文であるのにたいして、非人称構文は他動性の低い構文である。したがって、非人称構文を選択するということは、わざわざ他動性を低下させて出来事を表現する手段であるということになる。

上にあげた語順と他動性の関係と、そこから生ずる意味を示す例をひとつだけあげておこう。非人称ヴァリアントの psNP をたずねる疑問詞は *que/qu'est-ce que* であり、一般に *qui/qui est-ce qui* は容認されない (朝倉 1975)。

- (2) a. *Qu'est-il arrivé?*
b. **Qui est-il arrivé?*

これは *que* [-human] / *qui* [+human] の素性と上にあげた図式で容易に説明できる。一般に [+human] NP は high topicality / high agentivity であって、preverbal position が無標の位置である。つまり *Qui est arrivé?* が無標の疑問文であり、postverbal position を要求する非人称には適合しないのである。このため(2)b.の容認度は低くなる。

これについては *Damourette et Pichon* (Tome IV, § 1488) が Balzac から取った次のようなおもしろい例をあげている。

- (3) –*Qu'arrivera-il de tout ceci? dit le bonhomme épouvanté.*
–*Il vous arrivera mademoiselle Flore Brazier dans quatre heures d'ici, douce comme un (sic) peau de pêche, répondit monsieur Hochon.*
(H. de Balzac : *Un ménage de garçon*)

この例では *Il vous arrivera mademoiselle Flore Brazier* という非人称ヴァリアントが用いられている。postverbal position で [+human] NP が現れるのは上の図式に一見反するように見える。 *Flore Brazier vous arrivera.* と人称構文にするほうが理にかなっているように思える。しかしこの例は非人称ヴァリアントの性格を利用して、特殊な意味効果を生み出そうとした例であり、反例ではなく逆に上の図式の正しさを証明するものとなっている。Eskénazi (1968) も指摘するように、この例では *mademoiselle Flore Brazier* があたかも台風のように襲って来る災厄のように表現されており、*mademoiselle Flore Brazier* を「物化」して捕らえている。このような表現が可能なのは、その背景に上の図式があるからに他ならない。

4. 文の他動性 transitivity とは?

さて、上で他動性という用語を用いたのは、単に文中の動詞自身の他動性をさしているのではないことに注意したい。たとえば *casser* (ex. *Il a cassé un verre.*) という動詞は他動性が高く、*briller* (ex. *Le soleil brillait.*) という動詞はそれに比べれば他動性が低いという場合は、動詞自体の他動性を問題にしている。一方ここで問題にしたいのは文の他動性である。動詞の他動性は文の他動性を左右する大きな要因である。しかしそれだけが文の他動性を決定するわけではなく、動詞の表す出来事にかかわる参与項と動詞の関係全体が文の他動性を構成している。ここでは他動性の定義として次の Halliday の定義を参考にあげておく。

The linguistic expression of processes, and of the participants (and, by extension, the circumstances) associated with them, is known by the general term transitivity. (Halliday 1970:148)

transitivity system は process を表す動詞とその参与項 participant の言語表現を規定するものであるが、参与項のなかで中心的な役割を演じるのは動作主 agent である。process を認知し表現する際に、動作主を中心にとらえるか、それとも動作主を非中心にとらえるかは、文型に決定的な影響を与える。それはフランス語のようないわゆる「主語卓越型言語」subject prominent language⁷⁾においては、プロトタイプの主語は、談話構造上で主題であるとともに、意味構造上は動作主であるからである。

フランス語の transitivity system では、非人称ヴァリエーションを含めて一般に非人称構文は、動作主のない process (あるいは process を動作主のないものとして) 表現するオプションである。天候表現 (ex. il pleut, etc.)、必要・義務・難易などの表現 (ex. il faut..., il est nécessaire de..., etc.)、心理的事態の表現 (ex. il me semble..., etc.) などが、フランス語に限らず多くの言語で非人称かそれに類する構文で表現されることはよく知られている。これらは動作主のない process、もしくは動作主を想定することが困難な process であり、非人称で表されることには認知・意味的な動機づけ motivation がある。このように process を agent のないものとして表現することを、「動作主の背景化」agent backgrounding と呼ぼう。動作主の背景化は、態 diathèse と密接に関係する。Moignet (1970) はこの関係を次のように明確に述べている。

Il existe incontestablement une corrélation entre l'unipersonnel (=l'impersonnel) et la voix verbale, et, plus précisément, entre l'unipersonnel et toute voix non active (...) La sémantèse présentée en refus de référence à une personne humaine active est ainsi déclarée comme chose faite, résultative, passive, ce qu'elle est en soi. (...) Si la voix verbale est bien la catégorie qui définit la mesure dans laquelle la personne humaine possède la maîtrise de l'événement, — totale ou partielle ou nulle — on s'explique assez bien qu'une présentation de l'événement qui exclut la personne humaine et se confine dans la personne d'univers fasse valoir une affinité avec les voix qui refusent à la personne la conduction intégrale de l'événement.

(Moignet 1970 : 69-70) (カッコ内の付記は筆者による)

態の本質が、参与項が動詞の表わす process を全面的に統御するのか (能動態)、逆に全面的に統御を失うのか (受動態)、もしくはその両方を兼務するのか (中間態) という区別にあるとすれば、動作主の背景化を行なう非人称は、態の一部をなすと考えなくてはならない。この点で非人称と受動態とのあいだには、密接な関係が存在するのである。

5. 受動態の機能

受動態の本質的な機能は何かという問題には、さまざまな説がある。ざっと見渡した限りでも、次のような説が主張されてきた。

(a) 最小距離の法則 «la loi de distance minimale»

能動文の目的語（Oとする）が受動文で主語になって文頭に立つのは、先行文脈とのつながりを保証するために談話中の距離を最小にするためだとの説。Hupet & Costermans (1976), Pinchon (1977) など。

(b) 目的語の主題化（テーマ化）

受動文でOが主語になり文頭に立つのは、Oを文の主題 *thème* にするためであるとする説。Mathesisus (1928), Cinque (1976), 安井 (1978), Co Vet (1985) など。

(c) エンパシー

受動文でOが主語になり文頭に立つのは、話し手がOに感情移入を行ない、Oの視点から事態を表現するためだとする説。Kuno & Kaburaki (1976)、久野 (1978)。

(d) 動作主の焦点化

能動文の主語（＝動作主）が *by-agent* 補語 になり、文末の無標の焦点の位置に置かれる点を重要視する説。Halliday (1970), Lakoff (1971) など。

(e) 動作主の背景化・消去

能動文の動作主を、*by-agent* として文の周縁的位置に格下げしたり、消去するのが受動文の機能だとする説。Lyons (1971), Haiman (1976), Kirsner (1976), Shibanani (1985) など。

紙幅の関係で、それぞれの説の根拠とされる言語事象をあげることは控える。

上にあげた(a)～(e)の説を分類すると、OがSに昇格される点を重視する説と、逆にS(=agent)が降格される点を重視する説とに大別できる。ここでは前者を「昇格説」*promotional analysis*、後者を「降格説」*demotional analysis*⁸⁾と呼ぶ。(a)～(c)は表現こそ違え、ともに昇格説に属する。一方(d)～(e)はともに降格説なのだが、このふたつの主張するところはずいぶん違う。なぜなら、(d)は主語＝動作主が焦点位置におかれ、情報構造上で重要だと主張しており、(e)は逆に主語＝動作主が背景化されるのは認知・意味的に重要ではないからだと主張しているからである。

(d) は次のような理由で不適切であり、支持できない。

(i) 統計的には動作主補語を持つ受動文より持たない受動文の方が圧倒的に多い。Svartvik (1966) によると英語で80%、Le Goffic (1970) によるとフランス語で75%の受動文は動作主補語を持たない。

(ii) 通言語的に見ると、受動態で動作主補語の表現を許さない言語が多数存在する。このためKeenan (1985) は *basic passive* を定義するにあたって、動作主補語を受動文の特性から除外しているほどである。

(iii) 印欧語の歴史においても、動作主補語はあとになって出現したもので、もともとの受動態は動作主補語を持たなかったと見られる。以上のような理由により、受動文で動作主補語が焦点化されることがたまたまあったとしても、それは受動態にとって本質的ではないことは明らかである。

6. 動作主の背景化 – 降格説

ここでは動作主の背景化が受動態の本質的な機能であるとして、降格説を支持するのだが、その理由はいくつかある。

そのうち最も重要なのは「態」*diathèse* にとって、Oが主題化されるということは本質的ではないという点である。上にも述べたように態にとって中心的なのは、動詞のあらゆる事態 *process* への関わり方である。事態に参与する参与項 *participant* がその事態を引き起こす動作主・原因であるのか、それともその事態を被る被動作主であるのか態にとって本質的な区別であり、Oが主題化されるということは受動態にとっては二次的な事柄である。このためフランス語でも、Oの主題化を伴わない受動文が存在する。

(4) De plus, sera renforcée la participation française au programme Agymet, qui utilise les informations météorologiques reçues à Nyamey des satellites... (Le Matin 1986/2/7)

(5) A Nancy seront regroupés deux centres d'enseignement supérieur d'ingénieurs forestiers, qui seront tout particulièrement sensibilisés à ces problèmes. (Ibid.)

このような倒置受動文ではOは主題化されておらず、なぜ受動文が用いられているかをOの主題化で説明することはできない。

受動文が行政文書・科学論文などの客観性を重んじる文章で多用されることは、よく知られている。例えば次の文章は大学都市入居規則からの抜粋であるが、受動文の連続が見られる。

(6) Le parc de la Cité et les jardins autour des maisons de résidence sont placés sous la sauvegarde des résidents qui doivent s'abstenir d'y jeter des papiers, objets ou détritiques quelconques. Les pelouses n'ont pas à être piétinées, la circulation ou le stationnement peuvent y être interdits. Les sports et jeux ne peuvent être organisés que sur les emplacements et terrains aménagés à cet effet.

他の種類の文章に比べて、行政文書や科学論文でのみOの主題化がより多く必要になるということは考えにくい。Leech & Svartvik (1975) の指摘するように、受動文は文体的に「非人称スタイル」*impersonal style* に属していて、責任・原因の所在を消去することによって、客観的な表現を実現するとともに、曲げることのできない規則・法則として事柄を提示するという文体的効果を生むのである。

また、なかには受動文でしか表せないものもある。

(7) Tous les records d'affluences ont été battus pour le septième

Salon du livre de Paris qui devait fermer ses portes le mercredi 25 mars. (Le Matin 87/2/26)

ここでは動作主は Salon du livreの開催期間中に入場した不特定多数の人全員である。従って、on a battu...とか ils ont battu...のような能動文では表すことができない。Oの主題化がこの場合の受動文使用の理由ではなく、動作主を特定できないことが理由なのは明らかである。

7. 受動態の歴史

受動態の本質的機能が動作主の背景化ないし消去にあると考えるには、歴史的根拠がある。本来、印欧語の態は能動態と中間態の対立が基本であり、受動態はのちに形成されたものであると考えられている (Benveniste 1950, Lyons 1971, Lehmann 1974, Parker 1976)。今日この状態がギリシア語に見られることはよく知られているとおりで、ギリシア語においては受動態は中間態と未分化で、受動態独自の活用は未来とアオリストにしかない。Benvenisteは、印欧語においてはサンスクリット語の yajati「彼は (他人のために) 犠牲を捧げる」と yajate「彼は (自分の為に) 犠牲を捧げる」という対立が基本であり、前者では主語の外的動作を、後者では主語の内部にかかわる動作を表すというものであったと指摘している。

印欧語において受動態が形成された過程はいまだに議論のあるところであるが、なかでも説得力のある仮説として、中間態の非人称用法が介在したというものがある。Lyons (1971:375) は、主語が非動作主的に解釈されるときには、中間態と非人称とが融合する場合があります、これが印欧語における受動態の出発点になったと述べている。例えばラテン語の B movetur は英語にすると B moves. と B is moved. とも訳すことができるが、前者はパラフレーズすれば “There is movement, and B is affected (whether B is the cause, or agent, of the movement or not)” となると述べている。Bを非動作主と解釈すると、movetur は中間態の非人称用法であるということになる。すなわち中間態と非人称とが融合して受動態ができたというわけである。

この過程においては、非人称で表現される事態がまずあり、目的語名詞句はその事態によって変化を被るというプロセスが受動態の根本的意味であると解釈される。目的語の主題化は二次的な現象にすぎない。

同様に Statha-Halikas (1977) は、そもそも印欧語では itur in antiquam silvam “There-is-going in the old forest” のような自動詞の非人称が基本にあって、それが他動詞の非人称に拡張される過程で、もとの目的語の主語化がおこって受動態を生じたとする。

このような受動態の形成の歴史的過程を考えるならば、受動態の出発点は、出来事が動作主なしにひとりでに生じたことを表す非人称の表現であり、動作主の背景化こそ、その根源的な意味であったと見なすことができる。

8. 日本語の受動態 –レル、ラレル考

さて、ここで日本語に目を移してみると、日本語の受動態がいわゆる助動詞のレル・ラレルで表されることはよく知られている。

(8) a. 太郎が次郎を殺した

b. 次郎が太郎に殺された

日本語の受動文に関する研究で、上のような例文について次のような言及に出会うことがある。

「右の(=上の) a.も b.も「太郎」と「次郎」というふたつの項目があり、両者の間に「殺す」という関係があり、「太郎」がその<動作主>であり、「次郎」がその<受動者>であるという事柄を表す点ではちがいが無い。その知的意味は同じである」(奥津 1983:70)

このような観察は、受動文は能動文の単なる裏返しであるという想定に基づいており、初期の生成文法の「受動変形」の定式化を思わせる⁹⁾。ここで「知的意味」が何をさすかはともかくとして、受動文を能動文の裏返しとする見方は、日本語の言語事実に目をつぶるものであり、一般言語学的に言ってもまったく正しくない。

日本語の受動文については、国語学でもいくつかのタイプを分類することが行われているが、そのひとつにいわゆる「迷惑の受け身」がある。

(9) 子供に先立たれるほどつらいことはない

(10) いま彼に來られてはまずい

これは [+human] 名詞句を主語とする受動文であり、利害の意味を伴って、日本語本来の受け身表現であるとされることが多い。よく知られているように、この用法では目的語を持たない自動詞も受動文にすることができ、「妻に寝込まれた」「雨に降られた」など用例は多い。このような受動文は対応する能動文を持たない(*妻が私を寝込んだ)ので、上のような受動文=能動文の裏返し説は、この一事を取ってもまったく根拠を持たないことがわかる。

レル・ラレルには次の4つの意味が区別される。

(11) 私は父に叱られた(受動)

(12) この魚は生で食べられる(可能)

(13) 母の苦勞がしのばれる(自発)

(14) 社長はまもなく來られます(尊敬)

このうち尊敬の意味は古語のルに平安期にすでに見られるものの、派生的意味と考えられる。また自発は「思われる」「考えられる」「悔やまれる」「待たれる」「案じられる」などの心理的動詞に限られている。このことは、古語の助動詞ユにまで逆上する傾向であり、吉田(1973:178)によれば万葉集のユの用例421のうち、90%は「見ゆ」「思ほゆ」「聞こゆ」「知らゆ」などの心理・知覚動詞で占められるという。この点は日本語の受動文の性格を考える上できわめて重要である。レル・ラレルの持つ尊敬を除く残りの3つの意味のうち、どれが最も根源的な意味でどれが派生的であるかは説が分かれている。山田(1936:318)は受け身→自発→可能→尊敬の順に派生したとしている。しかし橋本(1974)、吉田(1971)、土屋(1974)、荒木(1985)などはレル・ラレルの基本的意味は自発であるとしており、今日この説を指示する人が多い。すなわち何かの事態が自然展開的に生じるということが、レル・ラレルの本来の意味であり、受け身の意味はそこから派生したとするのである。

このような派生がどう説明されるかを見ておこう。

「夕暮あかつきに河竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる（枕）
（このような）受け身の形式は典型的な受け身の形式にくらべると、自然状態的である点で多分に自発の形式に通じる性質を持っている。橋本進吉はこの種の受け身形式が自動詞と似た意味をもつことを指摘し、自発から受け身への推移はここから始まったのではないかとしている。（...）このように、受け身といっても、日本語の場合は、他からの動作を受けるという意識よりも、自分が関与しないのにある動作によって、自分がある状態におかれるという意識の方が強いのである。いずれにしても、自動詞をつくる接尾辞「ゆ」から自発形式が成立し、それから一方には受け身形式が、他方に可能形式が派生したとみるのが妥当であろう。」（竹内 1977:44）

このように、接尾辞のユから自発が出来て、それが受け身を成立させたのが確かならば、日本語の受動態のものは自発であったということになる。自発とは、動作主が関与しなくても自然発生的にある事態が生ずることをいうのであるから、これは非人称に他ならない。つまり受動態のものは非人称であるといっているのである。

9. 受動態と非人称

上にも述べたように、印欧語の受動態が非人称から派生したとされていることを考えれば、日本語でレル・ラレルというひとつのマーカ―が受動と自発の両方の意味を表わすことはさほど驚くことではない。またこのことは、日本語に見られる現象が決して歴史的偶然によって生じたものでもなければ、一言語に特有のものでもないことを示している。そこには通言語的に一般化の可能な、認知・意味的動機づけ motivation があるのである。（従って上の引用で竹内が、自発→受け身の派生が日本人の感覚に固有のものであるかのように論じていることには注意が必要だろう）

この問題が日本語に特有のものでないことを Langacker & Munro (1975) は示している。彼らによると中米のユト・アステカ諸語では、同じひとつの接辞が他動詞では受動文を、自動詞では非人称文を作るという。

- (15) a. ?anang-iiwa-t “There is crying.”
cry IMPERSONAL-PRESENT
b. ?aasin-iiwa-t “He is being bathed.”
bathe PASSIVE-PRESENT

(Langacker & Munro 1975:795)

またRosen & Wali(1989) は、ヒンディー語には彼らが regular passive と capability passive と呼ぶ2種類の受動文があり、後者は非人称受身で可能を表すことを報告している。

また正保（1985）によれば、インドネシア語の受動文のひとつに接辞 -ter によるものがあるが、この接辞は受動文を作る以外に、日本語の「見える」「聞こえる」に相当する自発の表現を作るという。

- (16) Terlihat olehnya seekor rusa
ter-see by+him one deer
「彼には一頭の鹿が見えた」

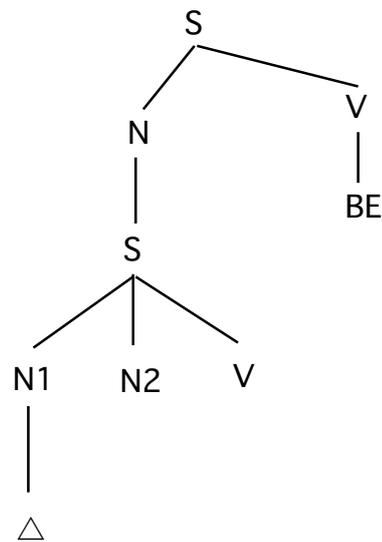
またこの-ter接辞は tertalik「心ひかれる」、terharu「感動する」、tertidur「つ

「い居眠りする」のように、心理動詞や非意図的動作を表すという。日本語との平行性は明らかであろう。

では受動態と非人称とをくくる共通項は何かというと、それは動作主の背景化 agent backgrounding である¹⁰⁾。受動態と非人称は transitivity system のなかでは共通する機能を果たしており、他動的事態に含まれる動作主を背景化することによって、その事態が動作主・原因なしに自然発生的に生じたものとして表現することを可能にしている。

Langacker & Munro (1975) は、このような受動態と非人称の連続性を表現するために、両方に共通する基底構造を立てている。

N1は主語、N2は目的語、BEはいわゆる higher S verb である。N1は非特定の主語 unspecified subject で、そのまま充填されなければ、結果として非人称文を得る。目的語のN2がN1の位置に昇格されると受動文を得る。この構造には動作主NPの表示はなく、受動文の動作主補語は後で付加されることになっている。



ここではこのような基底構造を立てることについての技術的妥当性は問題にしない。むしろこの図式が受動文と非人称文の共通点を概念化して示したものと受け取るべきである。

この図式にはもうひとつの興味ある点を示している。それは higher verb とされる BE である。このBEは受動文の助動詞として実現され、受動文が自動詞構文で、意味的には状態を表す静的な stative 文と類似することを表わしている。ここで注目されるのは、なぜ受動文でBE動詞もしくはそれに類似する動詞が用いられるのかということである。

英語ではBE動詞を用いた受動文の他に、getを用いた get-passive があるが、この get は She got sick. のように状態の変化を表す動詞である。またドイツ語の受動文を作る werden も状態変化の動詞である。Rosen & Wali (1989) で報告されているヒンディー語の受動文は go にあたる動詞を助動詞として用いているが、これも場所の移動が状態変化の意味で用いられたと考えられる。注目すべきは、日本語のル・ラルの語源である。これについてはまだ定説はないようだが、「有る」や「生(ある)」を語源とする説があり¹¹⁾、もしこれが正しいとすれば、日本語でも状態(変化)の動詞が受け身の意味を表していることになる。なぜ状態変化の動詞が受動文の助動詞として広く用いられているかは、受動態の本質が自発(能動的に働きかけなくても自然にそうなること)と考えれば、容易に理解することができるだろう。

10. 非人称と類似構文

なぜ transitivity system のなかに非人称のオプションが必要なのかというと、それは本来動作主のない事象(例えば天候表現など)や、動作主を想定することが困難な事象があるためである。MacCawley (1976) ではこのような事象を agentless phenomena と呼び、一見無関係に見える次のような構文が実はこのキーワードでくくることができることを示している。

(1) certain uses of Have / Be / Feel

(cf. *Il feel cold.* vs **I feel reliable*)

- (2) Existential S
- (3) Impersonal S
- (4) non-Agentive causatives (cf. *What John said made me happy.*)
- (5) Passives
- (6) certain uses of reflexives
- (7) Postal's Psych-movement S's

ここで心理・知覚動詞が問題になっているのが注目される。既に述べたように、日本語の古語の助動詞ユの用例は、古くは「思ほゆ」「知らゆ」などの心理・知覚動詞が大部分であり、また現代語の助動詞レル・ラレルの自発用法は、「思われる」「悔やまれる」「案じられる」などの心理動詞に限られる。これはそもそも心理や感覚などは、主体が能動的に感じるものではなく、自然に心に湧き上がって来るものだという捕らえ方が自然であり、自発用法に最も適した意味カテゴリーであることに由来するのは明らかである。いわば自発のプロトタイプのカテゴリーであると言ってもよい。

このことは日本語に限らない。古英語でも *me thinks (=I think)*, *me maetan (=I dream)* のような心理動詞、*me hyngrian (=I am hungry)* などの感覚動詞は知覚主体が与格に置かれる無主語文 (もしくは与格主語構文) であった。また古フランス語でも *Menberra moi de vos souvent (=Il me souviendra de vous souvent)*. のように心理動詞には現在よりも多く非人称動詞が用いられていたことはよく知られている。英語が歴史的変化の間にこのような非人称構文を失い、*me thinks* が *I think* のような普通の人称構文に変化したことは、本来動作主ではなく経験者格 *experiencer* なので与格におかれた感覚主体が、<主語-動詞>の文型をできるだけ意味的に <動作主-動作> と一致させようとする、英語の動作主中心的シンタクスの圧力によって、動作主に擬せられていったことを示している¹²⁾。

このような与格主語構文はロシア語・日本語にも見られる。

(17) *Jemu kholodno* "He is cold"
he-DATIVE cold-NEUTER

(18) 太郎にロシア語ができるとは知らなかった

この日本語のいわゆる「...ニ...ガ構文」の示すように、与格主語構文はしばしば可能・不可能を表す。

(19) *Jemu ne spitsa.* "He can't sleep."
he-DATIVE NEG sleep-REFLEX

このことが日本語の受け身レル・ラレルの可能用法と関係することは言うまでもない。

11. おわりに

受動態と非人称の対照言語学的比較を通じて、そのあいだに通言語的に存在する類似点を明らかにし、受動態と非人称とが機能的に連続しており、*transitivity system* のなかで共通する領域、すなわち自発的事態の表現を担っていることを示した。また、動作主を想定できない事態 *agentless phenomena* の表現のためには、多くの言語で通常のシンタクスとは異なるシンタクスが用いられており、そこ

にはかなりの共通性が見られることを示唆した。

フランス語に関しては、ここでは取り上げなかったが、代名動詞構文のある種の用法は同じ観点から考察する必要がある。よく知られているように、

(20) Ce poisson se mange cru.

のようないわゆる中間構文 *moyen* は、動作主補語の明示的表現を一般に許さない自発・可能・規範の意味を持つ構文であり、ここで述べたのと同じ角度からの分析が可能である¹³⁾。なぜこの構文が自発・可能・規範の意味を持つかは、受動態との連続性と非人称との連続性を考えれば容易に理解することができる。その背後にあるものはやはり動作主の消去であり、その結果「この魚を生で食べる」ということが、食べる主体の意志にかかわらず自発的に生ずる事態であり、自発的に生ずるということは可能・規範に通じる。従って、フランス語で *agentless phenomena* を論じる際には、*passif-impersonnel-pronominal* の三角形のなかで考える必要がある。この三角形は動詞の他動性、アスペクト制約、明示的動作主の有無などの要因に関して、機能の分担を行なっていると見ることができる。

ここでは、それぞれの構文についての細かい問題を論じるよりは、全体を通底する機能的領域を明らかにして、*transitivity system* のなかに位置付けることに力点を置いたので、それぞれの構文に関する問題は別稿に譲りたい。

【注】

- 1) 弱いテーマ・強いテーマという概念についてはTogo (1980)を参照。
- 2) 今日では主語という統語範疇は単一概念ではなく、複数の素性の束であると考えられている。主語を構成する素性を多く持つ名詞句は主語性が高く、少ししか持たない名詞句は主語性が低いとされる。主語を定義する素性については Keenan (1976) を参照。
- 3) *topicality* は名詞句の *topic* の度合いを意味する概念である。 *topicality* については Givón (1984) を参照。
- 4) *textual function* は Halliday の体系機能文法の概念である。 Halliday (1970)を参照。
- 5) *transitivity function* は Halliday の体系機能文法の概念である。これについてはHalliday (1970)を参照。
- 6) 他動性とアスペクトの関係については Hopper & Thompson (1980) を参照。
- 7) *subject prominent language* は Li & Thompson (1976) の提唱した概念である。
- 8) *demotional analysis / promotional analysis* は Postal と Perlmutter の関係文法の枠組のなかで受動文の分析が問題になったときに、どちらがより妥当かをめぐってひとしきり論争があった。ただし、その論争は関係文法の技術的問題をめぐるので、本稿の議論とは直接関係がない。
- 9) 現在のGB理論では受動変形の存在は否定され、受動文は基底で生成されるようである。GBの定式化では、受動文の主語名詞句は基底では動詞のうしろの目的語に位置に生成される。この点は受動文と非人称構文の共通点をはからずも示している興味深い。
- 10) *agent backgrounding* は言語構造を機能の観点から見る立場の用語である。Kanno (1989) はGB理論の立場から日本語の受動文を論じて、レル・ラレルの付加

によって、external θ -role の dethematization が起こるか (受け身・可能)、deletion が起こる (自発) ので、主語位置を θ mark できなくなると同時に、目的語が格表示を受けることができなくなり、目的語は主語位置に上昇するとの分析を示している。ここでいう external θ -role とは動作主の意味役割のことであり、技術的道具立てはちがっていても、本稿の分析と本質的には同じことを述べている。

11) この点については和田利政「る・らる - 受け身 <古典語>」(松村明 『助詞助動詞詳説』 学燈社) にまとめがあるので参照のこと。

12) Bloomfieldは著書 Language で、英語で好まれる文型は actor-action であると述べている。

13) moyen 構文については、荒井 (1987)、春木 (1987) を参照のこと。

【参考文献】

- 朝倉 季雄 (1975): 「現代フランス語における II+V+N型非人称構文」、『中央大学90周年記念論文集』 (『フランス文法論 探索とエッセー』 pp.86-105に採録)
- 荒井 文雄 (1987): 「se-moyen の意味論」、『フランス語学研究』 21号
- 荒木 博之 (1985): 『やまとことばの人類学』、朝日選書
- 奥津敬一郎 (1983): 「何故受身か? - <視点> からのケース・スタディー」、『国語学』 132集
- Benveniste, E. (1950): “Actif et moyen dans le verbe”, *Journal de Psychologie*, jan.fév. repris dans *Problèmes de linguistique générale* (1960)
- Cinque, G. (1976): “Appropriateness conditions for the use of passives and impersonals in Italian”, *Italian Linguistics* 1
- Co Vet (1985): “Passive, reflexive, and causative predicate formation in French”, Bolkestein et al.(eds) *Predicates and terms in functional grammar*, Foris
- Damoutette, J. et E. Pichon (1911-40): *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française*, D'Artrey
- Eskénazi, A. (1968): “Note sur les constructions impersonnelles du français contemporain”, *Revue Romane* 3
- Givón, T. (1984): *Syntax. A Functional-Typological Introduction*, vol.1, Benjamins
- Haiman, J. (1976): “Agentless sentences”, *Foundations of Language* 14
- Halliday, M.A.K. (1970): “Language Structure and Language Function”, J. Lyons (ed) *New Horizons in Linguistics*, Penguin Books
- 橋本 進吉 (1974): 『助詞・助動詞の研究』、岩波書店
- 春木 仁孝 (1987): 「フランス語の中立的代名動詞と非人称受身」、『言語文化研究』 XIII
- Hopper, P. & S. Thompson (1980): “Transitivity in grammar and discourse”, *Language* 56
- Hupet, M. et J. Costermans (1976): “Un passif : pour quoi faire”, *La linguistique* 2
- Kanno, K. (1989): “Dethematization in Japanese”, *Working Papers in Linguistics* 21-1, University of Hawaii
- Keenan, E.S. (1976): “Towards a universal definition of 'subjectc'”, C.N. Li (ed) *Subject and Topic*, Academic Press

- Ibid. (1985) : “Passive in the world's languages”, Shopen (ed) Language Typology and Syntactic Description, Cambridge University Press
- Kirsner,R.S.(1976) : “On the subjectless pseudo-passive in standard Dutch, C.N.Li (ed) Subject and Topic, Academic Press
- Kuno,S.&E.Kaburaki (1977) : “Empathy and Syntax”, Linguistic Inquiry 8
- 久野 すすむ (1978) : 『談話の文法』、大修館
- Lakoff,R.(1971) : “Passive resistance”, CLS 7
- Langacker,R.W.& P.Munro (1975) : “Passives and their meaning”, Language 51
- Leech,G.&J.Svartvik (1975) : A Communicative Grammar of English, Longman
- Le Goffic,P.(1970) : Linguistique et enseignement des langues à propos du passif en français, Larousse
- Lehmann,W.P.(1974) : Proto-Indo-European Syntax,University of Texas Press
- Li,C.&S.Thompson (1976) : “Subject and Topic:A new typology of language”, Li(ed) Subject and Topic, Academic Press
- Lyons,J.(1971) : Introduction to Theoretical Linguistics, Cambridge University Press
- MacCawley,N.A.(1976) : “From OE/ME impersonal to personal constructions”,CLS on Diachronic Syntax
- Mathesius,V.(1928) : “On linguistic charactology with illustrations from Modern English”, Vachek(ed) A Prague School Reader in Linguistics, Indiana University Press
- Moignet,G.(1970) : “Personne humaine et personne d'univers”, Etudes de psycho-systématique française, Klincksieck
- Parker,F.(1976) : “Language change and the passive voice”, Language 52
- Pinchon,J.(1977) : “Remarques sur le passif”, Le français dans le monde131
- Rosen,C.& K.Wali (1989) : “Twin passives, inversion and multistratalism in Marathi”, Natural Language and Linguistic Theory 7
- Shibatani,M.(1985) : “Passives and related constructions : a prototype analysis”,Language 61
- Statha-Halikas,H.(1977) : “From impersonal to passive : the Italo-celtic evidence”, CLS 13
- Svartcik,J.(1966) : On Voice in English Verb, Mouton
- 正保 勇 (1985) : 「日本語とインドネシア語の受動構文」、『日本語学』 4号
- 竹内 美智子 (1977) : 「助動詞 (1)」、『岩波講座 日本語 7 文法 II』、岩波書店
- Togo,Y.(1980) : “Thématisation et niveau communicatif de l'analyse linguistique”, 『フランス語学研究』 14号
- 東郷・大木 (1987) : 「非人称構文の談話機能について — 倒置構文との比較をめぐって」 『フランス語学研究』 21号
- 土屋 信一 (1974) : 「れる・られる <現代語>」、松村明編 『助詞助動詞詳説』 学燈社
- 安井 稔 (1978) : 『新しい聞き手の文法』、大修館
- 山田 孝雄 (1936) : 『日本文法学概論』、宝文館
- 吉田 金彦 (1971) : 『現代語助動詞の史的研究』、明治書院

ibid. (1973) : 『上代語助動詞の史的研究』、明治書院